巻一

一　序文

*風に紅葉の散る時は、さらでも物悲しきならひと言ひ置けるを、まいて*老いの涙の袖の時雨は晴れ間なく、*苔の下の出で立ちよりほかは、何の営みあるまじき身に、せめての*輪廻の業にや、昔見聞きし事、人の語りし事、そぞろに思ひ続けられて、*問はず語りせまほしき心のみぞ出で来る。その中に、なべて物語などに言ひ続けたる人には変はりて、艶にいみじうもあらず、*波の騒ぎに風静かならぬ世のことわりを思ひ知るかとすれど、それも立ち返りがちによろづにつけて心得ぬ人の上をぞ*案じ出だしたる。あまり*聞き所なきは、昔にはあらぬなんめり。

【語釈】

＊風に紅葉の散る時は―「神無月風に紅葉の散る時はそこはかとなくものぞ悲しき＝十月になって、風に紅葉が散る時は何となく悲しくて仕方がない」（新古今集・冬・五五二・藤原高光）に拠る。男主人公（二位中将・中納言兼右大将・内大臣と官職は異動するが、本文で男主人公の官職が明らかに語られている場合を除いては、男君と称する）の人生史の中で大きな転換点のひとつとなったのは、正妻一品宮の死、それも九月二十日であった点に着目すれば、「もみぢ葉を風にまかせて見るよりもはかなきものは命なりけり＝紅葉の葉が秋風に吹かれるがままにどこに飛んでいくのかわからないのを見ているよりも、それ以上にはかないものは人の命であった」（古今集・哀傷・八五九・大江千里）も考慮に入れておく必要があり、特に第四・五句に注意すべきだろう。　＊老いの涙―「神無月降りそふ袖の時雨かなさら

でももろき老いの涙に＝十月になって、時雨が降るのに加えて、そうでなくてもいつもより老いを嘆く涙によって朽ちやすい袖であることだ」（続拾遺集・雑秋・六三四・静仁法親王）に拠る。　＊苔の下の出で立ち―死出の旅路への準備。『源氏物語』行幸巻に同様の例として、「『さべき人々にもたち後れ、世の末に残りとまれるたぐひを、人の上にて、いと心づきなしと見はべりしかば、出で立ちいそぎをなむ思ひもよほされはべるに』」（大宮の光源氏への詞）がある。　＊輪廻の業―連声で「りんね」と読む。「輪廻の業」は中世王朝物語では管見の及ぶ限り、『恋路ゆかしき大将』に「（端山ト女一宮トノ仲ハ）あぢきなくむつかしの世の中や。これも輪廻の業にこそあんめれ」（巻五）と用いられており、その他には『今鏡』（打聞第十・作り物語の行方）や『梁塵秘抄口伝集』にもあるが、『源氏物語』には用いられておらず、「生死流転の原因となる悪業」（日本国語大辞典）の意であって、平安後期から中世にかけて使用された言葉であると考えられる。　＊問はず語りせまほしき心―辛島Aは参考歌として、「包めどもたへぬ思ひになりぬれば問はず語りのせまほしきかな＝隠していても恋の思いがこらえきれなくなったので、尋ねられもしないのに辛い思いを語り出したくなった事だ」（千載集・恋一・六四八・大納言成道）をあげる。　＊波の騒ぎに―「知りにけむ聞きても厭へ世の中は波の騒ぎに風ぞしくめる＝既に知った事だろう。改めて聞いて俗世を厭だと思え。世の中とは波の音の騒がしさに加えて風が後から後から吹いて来るようなものだ」（古今集・雑下・九四六・布留今道）に拠る。　＊案じ出だしたる―辛島Aは「案じ、出だし」として、「思いめぐらして、お目にかけているのです、の意か」と一案を提示している。　＊聞き所なきは―価値がないのは。

【訳文】

風に紅葉が散る時は、そうでなくてさえ悲しいものだと言われているが、それ以上に、時雨のごとき老いの涙で濡れる私の袖は乾く間がなく、死出の旅路への準備以外には、どのような用事もなさそうなこの身には、余程、輪廻の

なせるわざによるのだろうか、昔見たり聞いたりした事や、人の語った事が、やたらに思い続けられて、問わず語りをしたい気持ちだけが起こって来る。その中で、普通の物語などで語られて来た人とは異なり、魅力的ですばらしいわけでもなく、波の騒がしさのほかに風も吹いて穏やかではないこの世の無常の道理をなるほどと思っているようだけれども、ややもすると俗世に引き戻されそうで、万事につけて理解できにくい人の身の上を考えついた。余り聞く価値がないのは、昔の話ではないからなのだろう。

【考察】

この序文は、先蹤として中世王朝物語の『風につれなき』のそれに、

言の葉しげき呉竹の、世々の古言となりぬれば、何のをかしき節とてすぐれたる聞き所なけれど、おのづから心に止まりたる筋々を想ひ出でつつ、秋の明けがたき老いの寝覚めのつれづれなるままに、心をやりたりし問はず語りを書き集めて、止まらむ跡のあやしけれど。

とあり、注意すべきだと辛島Aは指摘している。

また、冒頭部が引歌によって起筆されている例は、『狭衣物語』では、

①少年の春惜しめどもとどまらぬものなりければ、三月も半ば過ぎぬ。御前の木立、何となく青みわたれる中に、㋑中島の藤は、松にとのみ思ひ顔に咲きかかりて、㋺山時鳥待ち顔なり。

の傍線部㋑㋺は、

㋑夏にこそ咲きかかりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな＝藤の花は、春から夏にかけて咲きかかるものだったのだ。藤の花は、松に咲きかかるものだとばかり思っていたのに（拾遺集・夏・八三・源重之）。

㋺我が宿の池の藤波咲きにけり山時鳥いつか来鳴かむ＝私の家の池のほとりの藤の花が咲いた事だ。山に籠ってい

る時鳥は、いつになったらやって来て鳴くのだろうか（古今集・夏・一三五・よみ人知らず）。

㋺我が宿の池の藤波咲きしより山時鳥待たぬ日ぞなき＝私の家の池のほとりの藤の花が咲いてから、山時鳥がやって来て鳴くのを待たぬ日はない（躬恒集）。

に拠っている。さらに『逢坂越えぬ権中納言』では、

②㋩五月待ちつけたる花橘の香も、昔の人恋しう、秋の夕べにも劣らぬ風に、うち匂ひたるは、をかしうもあはれにも思ひ知らるるを、㋥山時鳥も里なれて語らふに、三日月の影ほのかなるは、折から忍びがたくて、（下略）

の㋩㋥は、

㋩五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする＝五月を待って咲くという花橘の香りをかぐと、昔知り合いだった人の袖の香りがする事だ（古今集・夏・一三九・よみ人知らず）。

㋥足引きの山時鳥里なれてたそがれ時に名のりすらしも＝山時鳥が人里にすっかり馴れて、夕暮時に鳴いている事だ（拾遺集・雑春・一〇七六・大中臣輔親）。

に拠っており、引歌がちりばめられているわけだが、その他に『風につれなき』や『木幡の時雨』にもあり、これは平安後期物語から中世王朝物語にかけてしばしば見られる傾向であって、『風に紅葉』もその表現形態の影響を蒙っていると考えられる。ちなみに、『風に紅葉』に引歌として使用されている勅撰和歌集は、『古今集』が圧倒的に多く、ついで『後拾遺集』『新古今集』の順であるが、『古今集』からは恋の歌が多く引かれ、『後拾遺集』では春部に属する歌が多く引歌として用いられている。

ところで、この序文では「苔の下の出で立ちよりほかは、何の営みもあるまじき身に、せめての輪廻の業にや」の一文に表象されているように、仏教的色彩が強く、厭世的な雰囲気が色濃く漂っており、それは〈喪失〉という事と深く関わっているのではなかろうか。すなわち、『風に紅葉』という作品は、北の方一品宮の死と承香殿女御の異母

妹である故式部卿宮の姫君の行方不明事件を軸に、男君が加行のために官職までをも返上するという多くの〈喪失〉が語られている物語であって、〈喪失〉が多出する『浅茅が露』の影響も考えて置く必要があろう。とすれば、『風に紅葉』の冒頭の書き出しが「風に紅葉の散る時は、さらでも物悲しきならひと言ひ置けるを」で始まっているのは極めて表象的であり、まさに紅葉が風によって散るのであるから、そこにははかなさが内包されており、それが『風に紅葉』の主題に脈絡しているといえよう。

さらに、冒頭の「風に紅葉の散る時は」という書き出しは【語釈】の項でも触れておいたように、『新古今集』所収の藤原高光歌に拠っていると考えられる。高光歌の詞書は「天暦御時（私云、九四七―九五七）、神無月といふことを上に書きて、歌つかうまつりけるに」とあり、『高光集』でも「十月九日冷泉院の釣殿にて、神無月といふことを上に置きて歌詠ませ給ふに」（西本願寺蔵三十六人集）の詞書を伴って冒頭に配置されていて、「神無月風に紅葉の散る時は」の歌が『風に紅葉』の書き出しに用いられている点を看過すべきではなかろう。ちなみに、故右大臣九条師輔の八男（母親は醍醐天皇の皇女で、村上天皇の姉雅子内親王）で右近少将であった高光は、応和元年（九六一）十二月五日、特別な理由もなく、妻と幼い娘を残して二十三、四歳で突然出家したのである。それに対して、中世王朝物語全集の年立によれば、関白の息である男君（母親は当帝の妹女一宮）は巻二において二十一歳の時、聖から加行をするように警告され、正妻一品宮の没後、仏道修行に専念するために七歳の娘を残して官職を辞したのである。とすれば、上流貴族中の貴族であり、母親も皇女である高光と男君が幼い娘を残して修行生活を送り始める年齢という点でも共通しており、両者の類似性を見るのであって、『風に紅葉』巻一の冒頭が高光歌に依拠して語られている事から考えると、将来において男君が俗世間から離脱する事が予想されるのであり、冒頭部において男君の将来の動向が暗示されているのではないのか。

最後に「輪廻の業」ということばに一言触れて置く事にする。『恋路ゆかしき大将』の梅津妹君の異父姉である梅

津女君と端山との関係を知った恋路の妹の中宮（後に皇太后宮）が激怒した結果、娘で端山と結婚していた女一宮（一品宮）の産んだ若君を端山のもとに送り返すという状況にショックを受けた端山は官を辞して戸無瀬に籠るが、院の斡旋によって事態が好転し、皇太后宮は端山と女一宮との結婚を正式に認めたのである。この端山と女一宮との複雑な関係は「輪廻の業」と語られている（巻五）。既に辛島正雄が『恋路ゆかしき大将』と『風に紅葉』との関わりを論じているが（『中世王朝物語史論』下巻第Ⅳ部の五　笠間書院　二〇〇一・9。初出、一九八六・3）、このように両作品に「輪廻の業」という語句が用いられている事に注意しておくべきだろう。

二　男主人公の家系

関白左大臣にて、盛りの花などのやうなる人おはす。北の方は古き大臣の御女、*初元結の御契り浅からで住みわたり給ひし御腹に、いつしか若君出で来給ひて、世になうかしづかれ給ひしほどに、八年ばかりやありけん、*今の帝の一つ后腹、女一宮とて、九重の内に雲居深くいつかれ給ひし姫宮を、いかにたばかり給ひけるにか、盗みきこえ給ひて、世の騒ぎなりしかど、あらはれ出でてもいかがはせんに、御許しありしかば、御心ざし際もなくもていたつききこえ給ふめる御腹に、*若君、姫君、また出で来給へるいつかしさ、げにこの世のものならず、光を放つと言ふばかりものし給ふを、朝夕この御かしづきよりほかの事なし。

さるままには、*もとの上の御方をさをさまれになりゆく。三条わたりに住み給ひしかど、今少し東に寄りて、京極わたりに*玉鏡と磨きて、*宮の上と住みつき給へるほど遠からねば、*車の音、前駆の声も、さながら移りて聞こゆる、いかが御胸安からむ。されど、若君元服し給ひて、三位中将と聞こえし、十四にて権中納言になり給ひし、次の年の春の末つ方、にはかに亡せ給ひにしかば、あさまし心憂しともなのめならずかし。さらでもものをのみ思ひ

弱り給へる母上は、まして*嘆きに耐へぬあまりにや、ほどなく競ひ隠れ給ひにき。大臣もさは言へど、あはれに心憂く思し嘆きしかど、*まさる方のいたはしさにや、御言の葉にかけ給ふ事だにまれになりゆく。*あはれなる習ひなりかし。

【語釈】

*初元結の御契り―「初元結」とは元服の時に、初めて髪のもとどり（髪の頭の頂を束ねた所）を結う事で、既に辛島Aに指摘されているように、光源氏の父桐壺帝が光源氏と結婚する葵上の父左大臣に対して「いときなき初元結に長き世を契る心は結びこめつや＝幼い君が初めて結んだ元結に、あなたの娘との末長い縁を約束する気持ちをこめたのか」（源氏物語・桐壺巻）の歌を詠みかけている。　*今の帝の一つ后腹、女一宮とて、～御許しありしかば―辛島Aは「関白左大臣による女一の宮略奪のくだりは、『いはでしのぶ』巻一冒頭に見える右大臣（左大将の養父関白の弟）による女一の宮略奪事件の設定・措辞を襲っている。また、ここでの人物設定全体としては、『恋路ゆかしき大将』巻一冒頭における、初め右大臣の娘と結婚していた戸無瀬の入道が、後に式部卿宮の美しい娘を盗み出して熱愛し、二子に恵まれたものの、「もとの上」は夫の愛の移ろいを嘆いて死ぬ、という設定と酷似する」と指摘している。

*若君、姫君―若君は男主人公、姫君は後に中宮となる人物だが、本文で若君が先に記されているところから、若君と姫君とは兄妹と考えるべきか。なお、全集は姉弟とする。　*もとの上―最初の北の方。　*玉鏡と磨きて―辛島Aは参考として、「殿の西の対を、玉鏡と磨きておはす」（海人の刈藻・巻一）をあげる。　*宮の上―女一宮。　*車の音、前駆の声も、さながら移りて聞こゆる、いかが御胸安からむ―「車の音、前駆の声も、さながら移りて」とは、前を素通りして通過して行く状況を意味し、これを「前渡り」と称している。ちなみに『蜻蛉日記』において、夫兼家が愛人のもとに通うために道綱母邸を素通りして行く件（例えば、中巻天禄二年〈九七一〉の正月の記事）が典型的